

聖家族 2015.12.27

～イエスが望んでおられる「家族」～

「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか。」と。ルカによる福音書のなかで、それはイエスの最初の言葉です。

同じルカによる福音書の中で、この地上でのイエスの最後の言葉は、次のようになっています。「父よ、わたしの息を御手に委ねます…」と。

すなわち一生の初めから終わりまでイエスは、御父のことを常に思い御父の望んでおられることに常に従うことを心がけたと言うことをルカは強調していることが分かります。更にルカによると、エルサレムに引き返したヨセフとマリアは、見失ったイエスを「三日の後、見つけた」とあるように、十字架の上での死によってイエスを失った弟子たちも「三日の後」復活して生きておられるキリストを見つけました。

「ヨセフとマリアにはイエスの言葉の意味が分からなかった」と同じように、墓が空であることを確認したペトロにも、その意味が分かりませんでした。

このように読んでみると、ただいま朗読しました福音は、ただ単に少年イエスに関する歴史的なエピソードを語っているだけではないことが良く分かります。ナザレからエルサレムへの「旅」は、もう一つの「旅」を思い起こさせようとしています。

ヨゼフとマリアにとっても、それは我が子に対する驚き、疑問や分からないことを乗り越えて、信仰のうちに我が子を御父の子として受け入れる「旅」でした。

そして、それは弟子たちを始め、私たちを含めてイエスを信じようとする、すべての人の「旅」でもあります。

大人になって福音をのべ伝えたイエスは、母親マリアを「婦人」と呼びました。主よ「母上とご兄弟たちがお会いしたいと外に立っておられます」と知らされた時、「わたしの母、わたしの兄弟とは誰か」と言って、イエスは次のことを付け加えました。「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」と。

このような言葉を聞くと、イエスはずいぶん冷たいと思いがちな方は少なくないようですが、福音書は、人の私生活を暴露する週刊誌のようなものではありません。福音書は、御父の思い、御父の御旨を中心にして生きて来られたイエスを紹介しています。そして御父が望んでおられる家族を築き上げるには、血縁関係にも増して、イエスに従うことの方が遥かに大切なことであると教えています。

神は、国家、氏族、家族、個人の神ではありません。すべての人々の「父」なのです。

「聖家族」を、ヨゼフ、マリア、イエスだけに絞ってしまえば、イエスの教えを理解し損ないかねません。イエスは「家族」という、言葉の範囲を広げようとして、すべての人々は「御父の子」一つの家族であることを教えたのです。それゆえ、愛することということは、家族、民族、同じ国の同胞に限られているのではなく、すべての人に及び、すべての人に対して求められています。「愛すること」ということは、すべての人を「御父の子」として認め大切にすることを求めています。

二千年前の、ほとんどの人にとって、たとえユダヤ教の中であろうと、その考えは革命的で想像もつかない新しい発想でした。当時の多くの人、貧しい人、虐げられていた人、非人間的に扱われていた奴隷などにとって、それは正に「福音」。神からの嬉しい、思いがけないことばでした。

現在の私たちにとってイエスの考えは、それほど驚きを湧き起こさせるものではありませんが、現実をみると、それがどこまで実現されているのか？私たちの社会、世界の中で。私たちの共同体も、どこまで、その理想を目指し実現しようとしているのでしょうか。一年の終わりに、そのことについて少し考えることは必要なのではないのでしょうか。

狭い意味での「家族」夫、妻、子どもに対して、私たちはどこまで愛を注ぎ「御父の愛」を証しするように心がけたのでしょうか。

広い意味での「家族」教会、社会、世界、特にその中での弱い立場の人々、貧困のために将来が脅かされる子どもたちを、私たちは、どこまで愛し「御父の愛」を証しするように努めて来たのでしょうか。

主の祈りを唱える度に私たちは「天におられる、わたしたちの父よ」と祈っているのですが、私たちの生き方をみると、その「父」は、度々「自分だけの神」で終わってしまうのではないのでしょうか。

「自分の神」から「わたしたちの父」への信仰の「旅」は、まだまだ続きます。

だからイエス、マリア、ヨゼフという「家族」の模範に倣って生きるようにと、今日も教会から呼びかけられています。

ところで「模範」となっていることとは何でしょうか？イエスの次の言葉は答えになるのではないかと思います。「わたしが天から降ってきたのは、自分の意思を行うためではなく、わたしを、お遣わしになった父の御心を行うためである」と。

ヨセフとマリアが「我が子」から「御父の子」へと、信仰の「旅」を成し遂げたように、私たちもイエスとご両親の模範に倣って生きて行こうとすれば、きっと少しずつ「自分だけの神」から「わたしたちの父」へと信仰の「旅」を続けることができるでしょう。

日々出会っている人々も、自分と同じように「神の子」であり「聖家族」の一員であることに、もっと気づき、自覚することできるように、この感謝の祭儀の間にお祈りしたいと思います。

行橋・豊津教会主任司祭、ベリオン・ルイ神父